

# 明治期の漢語の理解

― 群化をめぐる ―

今 野 真 二

## 要旨

明治期に出版された漢語辞書は、見出項目とした漢語に簡単な語釈を配置するという形式を採っているものが多い。直前の見出項目の語釈と同じ語釈である場合、「上に同じ」などと記すことがある。「上に同じ」は、異なる漢語に同じ語釈を与えることを避けたい記述態度ともいえる。その記述態度は、異なる漢語を同じ語釈のものと包括的にとらえようとする態度ともいえるが、これは辞書編輯のための臨時的な「態度」ではなく、明治期の漢語の理解のありかたを示すものと考ええる。本論文では、こうした現象を「漢語の群化」と仮に名付け、漢語の群化をてがかりに明治期の漢語の理解のありかたを探ることを目的とした。明治二年に刊行された庄原謙吉編纂『漢語字類』と明治七年に刊行された津江左太郎編纂『漢語註解』をおもな資料として、両漢語辞書の「群化」の実態をまず報告した。こうした漢語の群化については、これまでに積極的に採りあげられていないので、実態の報告にも一定の意義があると考ええる。また、両漢語辞書の関係についてはこれまでに論じられていないが、群化のありかたは酷似しており、『漢語註解』は何かのかたちで『漢語字類』を参照して編纂されている可能性がたかいことを指摘した。また、そうした「可能性」の指摘と同時に、辞書体資料編纂にあたっての「模倣」と「創造」ということについても述べた。「群化」は結局は二字漢語の一字目の字義によって行なわれており、これは二字漢語の二字目の字義に重きをおかない漢語理解とみることができる。こうした理解のしかたは、漢語辞書特有のものではなく、ひろく看取されるものであることを指摘した。

## はじめに

明治二（一八六九）年一月に庄原謙吉輯『漢語字類』が刊行されている。当該辞書刊行後に刊行された「数千の掲出語を有する漢語辞書

の多く」が、その「掲出語の多数をこの『漢語字類』から直接に、あるいは間接に承けて成立している」（一四九頁）ことが松井利彦『近代漢語辞書の成立と展開』（一九九〇年、笠間書院）によって指摘されている。

『漢語字類』は、頭字が共通する漢語を集め、その頭字を部首別に配列しており、松井利彦「近代漢語辞書の基準」(京都府立大学学術報告「人文・社会」第四九号、一九九七年)によれば、四三四〇語を収めている。例えば、「恐」字を頭字にもつ漢語として、「キョウシユク(恐縮)」「キョウフ(恐怖)」「キョウク(恐懼)」「キョウコウ(恐慌)」「キョウカク(恐嚇)」の五つの漢語を、次のような形式にしたがって具体的に掲出している。

恐縮 <small>きょうしゅく</small>	一怖 <small>きょうふ</small>	コワガル
一懼 <small>きょうく</small>	一惶 <small>きょうかう</small>	上二同ジ
オソレイル	一嚇 <small>きょうかく</small>	オドス

すなわち、漢字列に振仮名を施して「見出し項目」として掲げ、その下部に「語釈」を配している。各項目は罫線で区切られた「格」に収められており、半葉は縦に三、横に七の格に(基本的には)区切られている。実際には、漢字列は行書体で示され、その下部に楷書体が置かれており、漢字列が二種類置かれているが、例示にあたつては漢字列を一つ掲げることにする。

右では、見出し項目「キョウコウ(恐慌)」の語釈位置に「上二同ジ」とある。この「上二同ジ」は改めていうまでもなく、前に置かれた「キョウク(恐懼)」の語釈「オソレイル」と「同ジ」とみるのが自然である。

見出し項目「キョウシユク(恐縮)」の語釈も「オソレイル」であるので、五つの漢語のうちの三つに「オソレイル」という語釈が与えられていることになる。例えば、見出し項目「シヨウテキ(悚惕)」(三十九丁表三行目)の語釈も(仮名遣いは異なるが)「ヲソレイル」であるので、他にも「オソレイル/ヲソレイル」という語釈が置かれた見出し項目は存在していることがわかるが、それについては今ここでは措く。

見出し項目「キョウク(恐懼)」に「オソレイル」という語釈を置き、その次の見出し項目「キョウコウ(恐慌)」の語釈を考えた時に、やはり「オソレイル」がふさわしいと考え、「上二同ジ」と記した、とみるのがもつとも現象寄りのみかたである。これを、漢語「キョウク(恐懼)」と漢語「キョウコウ(恐慌)」の語義の異なりよりも共通点を重視した語釈の選択とみることもできる。『漢語字類』は限られた紙面ではあるが、それを使つて語釈を示しており、積極的に語義の異なりを示すことも(しようと思えば)できる。しかしそれをしていない。

例えば明治十(一八七七)年十一月に刊行された、片岡義助編輯『文明いろは字引』においては「キョウク(恐懼)」に「ヲソレル」(八十七丁表七行目)、「キョウコウ(恐慌)」に「ヲソレイル」(八十八丁裏六行目)という語釈を与えており、(和語「オソレル」と「オソレイル」との語義の異なりがどの程度あるかということにはなるが)ひとまず異なる語釈を与えている。このようにすることもできる。異なる漢

語に同じ語釈を与えるという「現象」は『漢語字類』に限ったことではなく、明治期に刊行された漢語辞書類にひろくみられる「現象」である。

例えば明治九年四月に刊行された『開化節用集』においては、「畏承<sup>イシヨウ</sup> オソレイル」「畏怖<sup>イフ</sup> 同上」「畏懼<sup>イク</sup> 同上」「慇懃<sup>インギン</sup> ネンゴロ」「慇嘆<sup>インタ</sup> 同上（八丁裏）」「敗北<sup>ハイベク</sup> イクサニマケル」「敗亡<sup>ハイベウ</sup> 同上」「敗悶<sup>ハイモン</sup> 同上（十五丁表）」などとなる。

ところで、明治七（一八七四）年八月に刊行された津江左太郎編集の『漢語註解』においては、その「凡例」に「単語ノ義概ネ相ノ類似シテ頭字ノ同ジキモノハ之ノ一行中ニ挿入ノシ合シテ訓解ヲ下タスモノハ簡ノ便ヲ主トスレバナリ」〓は改行箇所、漢字字体を保存せず、振仮名を省いて引用したとあり、編集者津江左太郎が「概ネ相類似」した語義をもつと判断した漢語をひとまとまりにして掲出している。こうした「形式」を、紙面が限られている小型の辞書として出版されている漢語辞書が便宜的に採った「形式」とみることできるが、類似した語義をもつ漢語を一括してとらえようとしていることを示す「形式」とみることできる。本稿では、こうしたことに注目して、明治期の漢語の理解がどのようになされていたかについて考えることを目的としたい。

## 一 『漢語字類』の「上二同シ」

『漢語字類』においては、漢語「ヘイアン（平安）」に「オダヤカ」という語釈が置かれ、それに続く見出し項目「ヘイオン（平穩）」「ヘイセイ（平静）」には「上二同シ」とある。本稿においては、これを次のようなかたちで示すことにする。末尾には『漢語字類』における掲出位置を添えた。

ヘイアン（平安）・ヘイオン（平穩）・ヘイセイ（平静）〓オダヤカ（四丁裏）

考察の素材とするために、一〇〇例を示す。片仮名で（現代語としての）発音を示し、丸括弧内には漢字を添えた。

- 1 ジジョウ（事情）・ジジツ（事実）・ジタイ（事態）〓ワケガラ・ワケアイ（七丁表）
- 2 ショウニン（商人）・ショウコ（商賈）〓アキンド（八丁表）
- 3 イライ（依頼）・イヒョウ（依憑）〓タヨリニスル（十丁表）
- 4 ゾクジ（俗事）・ゾクム（俗務）〓セワゴト（十丁裏）
- 5 ジュウセキ（充積）・ジュウジツ（充実）〓タクサンアル（十三

丁表

6 キョウコウ (兢惶)・キョウテキ (兢惕) || オソレオオイ (十三丁裏)

7 シュウイ (周囲)・シュウヘン (周辺) || マワリ (十五丁表)

8 コウセキ (功績)・コウケン (功勳)・コウギョウ (功業) || テガラ (十八丁裏)

9 ベンリョク (勉力)・ベンレイ (勉励)・ベンキョウ (勉強) || セイヲダス (十九丁表)

10 クンコウ (勲功)・クンロウ (勲勞) || テガラ (十九丁裏)

11 ハクガク (博學)・ハクシキ (博識) || モノシリ (二十一丁表)

12 タクケン (卓見)・タクシキ (卓識) || タチコエタクケンシキ (二十一丁裏)

13 ワボク (和睦)・ワギ (和議) || ナカナオリ (二十五丁表)

14 コンク (困苦)・コンナン (困難) || ナンジュウスル (二十六裏)

15 タイガイ (大概)・タイリヤク (大略)・タイハン (大凡)・タイテイ (大抵) || オオカタ (二十八裏)

16 ケイ (奇計)・キボウ (奇謀)・キサク (奇策) || フシギナテダテ (二十九丁表)

17 キコウ (奇功)・キン (奇勳) || フシギナテガラ (二十九丁表)

18 チョウケン (寵眷)・チョウグウ (寵遇) || キニイル (三十一丁表)

19 ソウケツ (巢穴)・ソウクツ (巢窟) || スミカ (三十二丁裏)

20 セイバツ (征伐)・セイトウ (征討) || カミヨリシモノツミヲセメウツ (三十五丁表)

21 サイノウ (才能)・サイリョク (才力) || ハタラキ (三十七丁表)

22 チュウジツ (忠実)・チュウセイ (忠誠) || ジツイヲツクス (三十七丁裏)

23 ヒタン (悲歎)・ヒショウ (悲傷) || シュウシヨウウスル (三十九丁表)

24 コンガン (懇願)・コンキ (懇祈) || ワリナキネガイ (四十丁表)

25 コンカン (懇歎)・コンセツ (懇切) || ネンゴロ (四十丁表)

26 カイダ (懈怠)・カイトイ (懈怠) || ヤリバナシ (四十丁裏)

27 ホウトウ (放蕩)・ホウイツ (放佚) || ドウラク (四十四丁裏)

28 ハイボク (敗北)・ハイソウ (敗走) || イクサニマケル (四十五丁表)

29 シンシャク (斟酌)・シンリョウ (斟量) || ミハカライ (四十六丁表)

30 アイマイ (曖昧)・アイゼン (曖然) || ボンヤリ (四十八丁裏)

31 サイノウ (材能)・サイヨウ (材用) || ハタラキ (五十丁表)

32 カケツ (果決)・カダン (果斷) || フンギリガヨイ (五十丁裏)

33 サケン (査検)・サシヨウ (査照)・サカン (査看)・サテン (査

点)・サエツ(査閱) ||ギンミスル(五十丁裏)

34 カイモ(楷模)・カイホウ(楷法)・カイソク(楷則) ||テホン  
(五十二丁裏)

35 スウキ(枢機)・スウヨウ(枢要)・スウジク(枢軸) ||カンジ  
ンナコト(五十一丁裏)

36 モカイ(模楷)・モハン(模範) ||テホン(五十一丁裏)

37 キカイ(機会)・キジ(機事) ||カラクリ(五十一丁裏)

38 ケンドウ(権道)・ケンギ(権宜) ||ミハカライ(五十二丁表)

39 ケンセイ(権勢)・ケンペイ(権柄)・ケンヨウ(権要) ||イセ  
イ(五十二丁表)

40 キサ(欺詐)・キタイ(欺給) ||ウソ(五十二丁裏)

41 カンキ(歡喜)・カンエツ(歡悅) ||ウレシイ(五十二丁裏)

42 レキカン(歴観)・レキラン(歴覧) ||ミワタス(五十三丁表)

43 キリン(氣稟)・キシツ(氣質) ||ウマレツキ

44 ホウソク(法則)・ホウド(法度) ||オキテ(五十六丁表)

45 タンパク(淡泊)・タンパク(淡薄) ||アツサリ(五十七丁表)

46 センケン(浅見)・センシキ(浅識) ||アサハカナケンシキ(五十七  
丁裏)

47 ゲンシヨウ(減少)・ゲンソン(減損) ||ヘラス(五十七丁裏)

48 ショウリョ(焦慮)・ショウシ(焦思)・ショウシ(焦志) ||キ

ヲモム(五十九丁表)

49 セイサン(生産)・セイカツ(生活)・セイリ(生理) ||ナリワ  
ヒ(六十四丁裏)

50 イフク(畏服)・イシユク(畏縮) ||オソレイル(六十五丁表)

51 ソソウ(祖宗)・ソセン(祖先) ||センソ(六十九丁表)

52 クンキユウ(窘急)・クンコン(窘困) ||コマリハテル(七十一  
丁表)

53 ゴウケツ(豪傑)・ゴウユウ(英雄)・ゴウマイ(豪邁) ||スグ  
レモノ(七十三丁表)

54 セツケン(節儉)・セツセイ(節省) ||ムダヲセヌ(七十四丁裏)

55 カンイ(簡易)・カンリヤク(簡略)・カンヤク(簡約)・カン  
ベン(簡便) ||テガル(七十五丁表)

56 カンコツ(簡忽)・カンタイ(簡怠) ||ゾンサイ(七十五丁表)

57 フンジョウ(紛擾)・フンラン(紛乱)・フンコツ(紛冗) ||サ  
ワガシイ(七十六丁表)

58 フンソウ(紛争)・フントウ(紛闘) ||ケンカ(七十七丁表)

59 ハンエイ(繁榮)・ハンザツ(繁雑) ||ニギヤカ(八十二丁表)

60 エイヘイ(翳屏)・エイヘイ(翳蔽) ||カクス(八十二丁表)

61 ソウメイ(聡明)・ソウケイ(聡慧)・ソウロウ(聡朗)・ソウ  
エイ(聡叡)・ソウビン(聡敏)・ソウエイ(聡穎)・ソウゴ(聡

悟) || リコウ・ハツメイ (八十三丁裏)

62 ダツリヤク (脱略)・ダツカン (脱簡)・ダツイ (脱易) || テガ  
ルイ (八十五丁表)

63 フハイ (腐敗)・フラン (腐爛) || クサレル (八十六丁表)

64 シケイ (至敬)・シキョウ (至恭) || シゴクツツシム (八十七丁裏)

65 カコク (苛刻)・カコク (苛酷) || テヒドイ (八十九丁表)

66 エイマイ (英邁)・エイシュン (英俊)・エイゲン (英彦)・エ  
イテツ (英哲) || ナミスグレタヒト (八十九丁裏)

67 コウブ (荒蕪)・コウハイ (荒靡) || アレハテル (九十丁表)

68 ラクハク (落魄)・ラクハク (落泊)・ラクハク (落剝) || オチ  
ブレル (九十二丁表)

69 ハンエン (蕃衍)・ハンシヨ (蕃庶)・ハンシヨク (蕃殖) || フ  
エル (九十二丁表)

70 ハクメイ (薄命)・ハクコウ (薄倖) || フシアワセ (九十二丁表)

71 ケンシユク (虔肅)・ケンカク (虔恪)・ケンケイ (虔敬)・ケ  
ンキョウ (虔恭) || ツツシム (九十三丁表)

72 キョボウ (虚妄)・キョタン (虚誕) || ウソ (九十三丁表)

73 ショチ (處置)・ショブン (處分) || トリサバキ (九十三丁裏)

74 スイジャク (衰弱)・スイヘイ (衰弊)・スイヒ (衰疲) || ヨワ  
ル (九十六丁表)

75 ホウシヨウ (褒賞)・ホウヨ (褒譽) || ホメル (九十六丁裏)

76 サイバン (裁判)・サイセイ (裁制)・サイダン (裁断)・サイ  
ケツ (裁決) || サバク (九十八丁表)

77 キボ (規模)・キソク (規則)・キセイ (規制)・キハン (規範)  
|| キマリ (九十九丁表)

78 ケイサン (計算)・ケイサク (計策) || ツモリ (二〇〇丁裏)

79 サボウ (詐謀)・サジュツ (詐術)・サキヨ (詐虚) || コシラエ  
ゴト (二〇一丁裏)

80 ジュンシ (詢咨)・ジュンボウ (詢謀) || ソウダンスル (二〇二  
丁表)

81 キボウ (詭謀)・キケイ (詭計)・キジュツ (詭術) || コシラエ  
ゴト (二〇二丁裏)

82 ガイハク (該博)・ガイコウ (該治)・ガイラン (該覧)・ガイ  
ショウ (該渉)・ガイツウ (該通) || モノシリ (二〇二丁裏)

83 チュウリク (誅戮)・チュウバツ (誅罰) || オシオキニスル (二〇三  
丁表)

84 セットク (説得)・セツユ (説諭) || イイキケル (二〇三丁表)

85 ヒボウ (誹謗)・ヒシ (誹訾) || ワルイイ (二〇四丁表)

86 ロンベン (論辯)・ロンセツ (論説) || シャベル (二〇四丁裏)

87 シボウ (諮謀)・シジュン (諮詢)・シブン (諮問) || ソウダン

スル(一〇五丁表)

88 ケンソン(謙遜)・ケンタイ(謙退) || エンリヨスル(一〇五丁表)

89 ショウケン(證驗)・ショウセキ(證跡)・ショウサ(證左) ||

ショウコ(一〇六丁表)

90 サンショウ(讃称)・サンビ(讃美) || ホメル(一〇七丁表)

91 ザイカ(財貨)・サイフ(財賦)・サイブツ(財物) || カネタカラ(一〇八丁表)

92 ビンボウ(貧乏)・ヒンコン(貧困)・ヒンク(貧窶) || クラシカネル(一〇八丁裏)

カネル(一〇八丁裏)

93 カンテツ(貫徹)・カンツウ(貫通) || ツキトオル(一〇八丁裏)

94 シンジュツ(賑恤)・シンキュウ(賑給) || ホドコシヲスル(一〇九丁裏)

丁裏

95 キハン(規範)・キテツ(規轍) || キマリ(一一二丁裏)

96 ホヨク(輔翼)・ホヒツ(輔弼) || ホサスル(一二二丁裏)

97 ウエン(迂遠)・ウカツ(迂闊) || マワリドオイ(一二四丁表)

98 ツイゲキ(追撃)・ツイバツ(追伐)・ツイトウ(追討) || オイウチ(一二四丁裏)

ウチ(一二四丁裏)

99 ツイソウ(追想)・ツイネン(追念)・ツイオク(追憶) || アトカラオモイヤル(一二四丁裏)

カラオモイヤル(一二四丁裏)

100 タツジン(達人)・タツシャ(達者) || コトニユキワタリシヒ

ト(一二七丁裏)

右に掲げた例においては、『漢語字類』に「上二同シ」と記されており、これは編纂者である庄原謙吉が、複数の漢語の語釈を「同シ」|| 同一と判断しているとみることができる。「同シ」をそのままうけとめれば、「同義」ということになるが、ここでは、厳密な意味合いでの同義語は存在しない、というみかたを採って、この「同シ」を「同義」ではなく「類義」ととらえることにする。このように、類似した語義をもつ(と思われる／と判断される)漢語を集めてグループ化することを仮に「群化」と呼ぶことにする。右に掲げた一〇〇例は、庄原謙吉が「群化」したことになる。

一方、「丁寧」ネンゴロ(六丁裏五行目)、「慇懃」ネンゴロ(四十丁表二行目)は、連続しない箇所それぞれの見出し項目が置かれているために、語釈に「上二同シ」とは記されていないが、与えられている語釈は等しく、これを(庄原謙吉以外の人物が)「群化」することができ、例25では連続している見出し項目「コンカン(懇款)」「コンセツ(懇切)」に語釈「ネンゴロ」が与えられており、先の「丁寧ネンゴロ」、「慇懃ネンゴロ」とを合わせると、「テイネイ(丁寧)」「インギン(慇懃)」「コンカン(懇款)」「コンセツ(懇切)」が「ネンゴロ」という和語を語釈にもつ見出し項目として「群化」することが

できる。他にも、例 8 と例 10 とはともに語釈が「テガラ」となっており、それぞれに群化されている漢語を合わせることができる。同様の例として、例 34 と例 36 (語釈「テホン」)、例 40 と例 72 (語釈「ウソ」)、例 79 と例 81 (語釈「コシラエゴト」)、例 80 と例 87 (語釈「ソウダンスル」)、例 75 と例 90 (語釈「ホメル」)、例 77 と例 95 (語釈「キマリ」) などがある。

## 二 『漢語註解』の群化

先に述べたように、津江左太郎が編纂した『漢語註解』においては、類似した語義をもつと津江左太郎が判断した漢語をまとめ、それに対して一つの語釈を与えている。つまり、『漢語註解』は積極的に「群化」を行なっている漢語辞書といえる。一においては、『漢語字類』における「群化」を 100 例掲げたが、ここでは一に掲げた 1 から 50 までの例を参照しながら、『漢語註解』の「群化」の例を掲げることにする。番号がとんでいるところは、『漢語註解』に当該漢字の掲出がなかった箇所。

1 ジジョウ (事情)・ジジツ (事実)・ジタイ (事態) || ワケガラ (五丁表)

2 ショウウコ (商賈)・ショウニン (商人) || アキンンド (六丁表)  
3 イライ (依頼)・イヒョウ (依憑) || タヨル (九丁表)  
4 ゾクジ (俗事)・ゾクジン (俗塵) || ヨノナカノコト／ゾクム (俗務) || セワゴト (九丁裏)

5 ジュウセキ (充積)・ジュウジツ (充実) || タクサンアル (十二丁裏)

6 キョウク (兢懼)・キョウテキ (兢惕) || オソレル (十三丁表)  
8 コウクン (功勲)・コウギョウ (功業)・コウセキ (功績)・コウコウ (功效) || テガラ (十八丁表)

9 ベンレイ (勉勵)・ベンキョウ (勉強)・ベンリョク (勉力) || セイラダス (十九丁表)

10 クンコウ (勲功)・クンセキ (勲績)・クンロウ (勲勞) || テガラ (十九丁裏)

11 ハクシキ (博識)・ハクブン (博聞)・ハクガク (博學) || モノシリ (二十一丁表)

13 カギ (和議)・カボク (和睦)・カジュン (和順)・カジュク (和熟)・カシン (和親)・カカイ (和解) || ナカノヨクナル (二十四丁表)

14 コンク (困苦)・コンナン (困難)・コンヤク (困厄)・コンクン (困窘) || ナンジュウスル (二十五丁裏)

15 タイガイ (大概)・タイホウ (大方)・タイハン (大凡)・タイ



- テイ(大抵)・タイリヤク(大畧) || オオカタ(二十八丁裏)  
 16 キサク(奇策)・キボウ(奇謀)・キケイ(奇計) || フシギノテ  
 ダテ(二十八丁裏)  
 17 キコウ(奇功)・キクン(奇勲) || フシギノテガラ(二十八丁裏)  
 18 チョウケン(寵眷)・チョウアク(寵渥)・チョウカ(寵過)・  
 チョウアイ(寵愛) || オキニイル(三十二丁表)  
 19 ソウケツ(巢穴)・ソウクツ(巢窟) || スミカ(三十四丁表)  
 20 セイバツ(征伐)・セイセン(征戦)・セイトウ(征討) || カミ  
 ヨリシモノツミヲセメウツ(三十七丁裏)  
 22 チュウチヨク(忠直)・チュウジツ(忠実)・チュウリョウ(忠良)・  
 チュウセイ(忠誠)・チュウシン(忠信) || ジツイニタダシキ  
 (三十六丁裏)  
 23 ヒタン(悲歎)・ヒショウ(悲傷)・ヒアイ(悲哀) || カナシミ  
 ナク(四十一丁表)  
 24 コンガン(懇願)・コンキ(懇祈) || ワリナキネガイ(四十二丁裏)  
 25 コンカン(懇款)・コンメイ(懇命)・コンセツ(懇切)・コン  
 ジョウ(懇情) || ネンゴロ(四十二丁裏)  
 26 カイダ(懈怠)・カイトイ(懈怠) || ヤリハナシ(四十二丁裏)  
 27 ホウトウ(放盪)・ホウイツ(放佚) || ドウラク(四十七丁裏)  
 28 ハイジク(敗衄)・ハイボク(敗北)・ハイグン(敗軍)・ハイ  
 ソウ(敗走)・ハイカイ(敗潰)・ハイセキ(敗績) || イクサ  
 ニマケル(四十八丁表)  
 29 シンシヤク(斟酌)・シンリョウ(斟量) || ミハカライ(四十八  
 丁裏)  
 30 アイマイ(曖昧) || マギラハシク/アイゼン(曖然) || タナビ  
 ク(五十一丁表)  
 32 カダン(果斷)・カケツ(果決) || オモイキリヨキ(五十二丁裏)  
 33 サシヨウ(査照)・サエツ(査閱)・サケン(査検)・サテン(査  
 点) || ギンミスル(五十三丁表)  
 34 カイボ(楷模)・カイソク(楷則) || テホン(五十三丁裏)  
 35 スウキ(枢機)・スウヨウ(枢要) || カンジンナコト(五十三丁裏)  
 36 モカイ(模楷)・モハン(模範) || テホン(五十四丁表)  
 37 キジ(機事)・キカイ(機会) || テハズ(五十四丁表)  
 38 ケンドウ(権道)・ナシ/ケンギ(権宜) || ヨキハカライヒ(五十四  
 丁表)  
 39 ケンセイ(権勢)・ケンペイ(権柄)・ケンイ(権威) || イセイ  
 (五十四丁表)  
 40 キソ(欺詐)・キタイ(欺給) || ウソ(五十四丁裏)  
 41 カンエツ(歓悦)・カンキ(歓喜) || ウレシキ(五十四丁裏)  
 42 レキカン(歴観)・レキラン(歴覧) || ミワタス(五十四丁裏)

43 キリン(氣稟)・キシツ(氣質) Ⅱウマレッキ(五十六丁表)  
 44 ホウソク(法則)・ホウセイ(法制)・ホウリツ(法律)・ホウド(法度) Ⅱオキテ(五十七丁表)

45 タンハク(淡泊)・タンミ(淡味)・タンパク(淡薄) Ⅱサツパリ(五十八丁表)

47 ゲンシユク(減縮)・ゲンシヨウ(減少)・ゲンセイ(減省)・ゲンソン(減損) Ⅱヘラス(五十八丁表)

48 ショウシ(焦思)・ショウリョ(焦慮) Ⅱキヲモム(五十九丁裏)  
 49 セイギョウ(生業)・セイサン(生産) Ⅱスギワイ(六十三丁表)

セイカツ(生活)・セイメイ(生命) Ⅱイキテオル(六十三丁表)  
 50 イシユク(畏縮)・イフク(畏服)・イク(畏懼) Ⅱオソレイル(六十三丁裏)

『漢語註解』においては「水之部」が五十六丁表の十二行目から始まり、五十九丁表の九行目で終わる。すべてで五十八字を掲げているが、そこに「浅」字は含まれていない。一方、『漢語字類』は「浅」字を探りあげている。そうしたことはもちろんあり得ることとして、右の1〜50をみると、異なりはあるものの、「群化」のしかた、それに与えた語釈、いずれにおいても、『漢語字類』ときわめてちかい。

これまでに具体的に指摘されたことはないが、『漢語註解』の成立

に『漢語字類』が(何らかのかたちで)かかわっているとすれば、参照する(Ⅱ下敷きにする)辞書があつたとしても、右の程度の「異なり」はある、ということになる。

「異なり」を具体的に説明する。例4において、『漢語字類』は「ゾクジ(俗事)」と「ゾクム(俗務)」とを群化して、「セワゴト」という語釈を置く。『漢語註解』は、「ゾクジ(俗事)」と「ゾクジン(俗塵)」とを群化して、それに「ヨノナカノコト」という語釈を置き、「ゾクム(俗務)」には「セワゴト」という語釈を置いている。この場合は群化のしかたが異なることになる。

例8においては、『漢語字類』は「コウセキ(功績)」・「コウクン(功勳)」・「コウギョウ(功業)」を群化し、それに「テガラ」という語釈を置く。一方、『漢語註解』はさらに「コウコウ(功效)」を加えて群化している。この場合は、群化している漢語の数が異なる。また、例14においては、『漢語字類』が「コンク(困苦)」・「コンナン(困難)」の二語を群化して「ナンジュウスル」という語釈を与え、『漢語註解』はさらに「コンヤク(困厄)」・「コンクン(困窘)」の二語を加えて群化している。

例22においては、『漢語字類』が「チュウジツ(忠実)」・「チュウセイ(忠誠)」の二語を群化し、「ジツイヨックス」という語釈を与え、『漢語註解』はさらに「チュウリョウ(忠良)」・「チュウチョク(忠直)」・「チュウシン(忠信)」を加えて群化し、「ジツイニタダシキ」という語釈

を与えている。この場合は、群化のしかた、語釈の与えかた、ともに異なる。

辞書の編纂について「模倣」と「創意」ということがとりざたされることがある。ここでも、その表現を使うことにすれば、『漢語註解』が『漢語字類』を参照して編纂されたと仮定した場合、そうであつても右の程度の「創意」はある、ということになる。辞書研究においては、先行辞書とのかかわりがまず検証されることが多い。先行する辞書を百パーセント「模倣」して編集された辞書は考えにくく、なにほどこかの「異なり」がある場合が多い。その「異なり」は、いえば「創意」ということになるはずであるが、そのようにみなされる場合は必ずしも多くはない。八十パーセントが「模倣」であれば、二十パーセントが「創意」になるはずで、その「創意」をじっくりと観察することによつて、何らかの知見を得ることができると考えるが、こうした場合、「模倣」の八十パーセントによつて、当該辞書が「価値のないもの」とみなされることがほとんどではないか。言語研究という枠組みの中で行なわれる辞書研究は、辞書の優劣を判断することのみを目的としているわけではない。八十パーセントが「模倣」されていたとしても、二十パーセントの「創意」の冷静な観察が必要である。

（そういうことは考えにくいと思われるが）『漢語註解』が『漢語字

類』とはかわりなく編纂されていた場合、両辞書の重なり合いは、そのまま両辞書が編纂された時期に共通した認識であつたことになる。

本稿は両辞書の系譜的聯関を明らかにすることを一義的な目的としていないので、ひとまずは二つの可能性について概説するにとどめることにする。

### 三 群化について

例えば岩崎茂実編纂の『新撰字解』（明治七年八月刊、一〇二八四語所収）においては、「懇」字を頭字とする漢語について次のように語釈が与えられている。

- 1 コンイ（懇意） ネンゴロナココロ
- 2 コンシ（懇志） 同上|| ネンゴロナココロ
- 3 コンシン（懇信） 同上|| ネンゴロナココロ
- 4 コンセツ（懇切） 同上|| ネンゴロナココロ
- 5 コンガン（懇願） ネンゴロノネガヒ
- 6 コンキ（懇祈） ネンゴロニイノル
- 7 コンカン（懇歎） ネンゴロニモテナス

- 8 コンセイ (懇情) ネンゴロナナサケ
- 9 コントク (懇篤) アツキココロ
- 10 コンコウ (懇厚) 同上 アツキココロ
- 11 コンメイ (懇命) ネンゴロナヲホセ
- 12 コンユ (懇諭) ネンゴロニサトス
- 13 コンモウ (懇望) ネンゴロニゾム

『漢語註解』においては、「コンガン (懇願)」「コンキ (懇祈)」を群化して「ワリナキネガヒ」という語釈を与え、「コンカン (懇歎)」「コンメイ (懇命)」「コンセツ (懇切)」「コンジョウ (懇情)」を群化して「ネンゴロ」という語釈を与えている。

『新撰字解』の1〜13をみると、例えば「コンセイ (懇情)」を「コン (懇)」「セイ (情)」とに分解し、「コン (懇)」を「ネンゴロ」、「セイ (情)」を「ナサケ」ととらえ、両者を結びつけて語釈としていると思われる例が少なくない。1・2・3、5・8、11・13はそのようにみることができる。右の1〜13はいずれも「懇」字を頭字とする漢語であり、9・10以外はその「懇」字を「ネンゴロ」ととらえている。一字目をこのように同じ和語でとらえた場合、各漢語の語義差は二字目が担っていることになる。二字目に対応する和訓によって、漢語全体の語義差を説明しているのが右の1〜13の「基本的なやりかた」と

いえよう。この説明、理解のしかたは、原則的に漢語の語義差を説明しようとするやりかたといえよう。

『漢語註解』は「コンカン (懇歎)」「コンメイ (懇命)」「コンセツ (懇切)」「コンジョウ (懇情)」を「ネンゴロ」と説明している。しかし、「命」字字義を考えれば、「コンメイ (懇命)」は「ネンゴロナルオホセ」(明治十二年五月刊、『必携熟字集』上一五三表)、「情」字字義を考えれば「コンジョウ (懇情)」は「ネンゴロナココロ」(同前)と理解するのがむしろ自然であろう。

例えば、両辞書よりも成立時期が降り、明治二十四年に完結した国語辞書『言海』においては(発音が異なる見出し項目ではあるが)「こんせい (懇情)」を「ネンゴロナルナサケ。我ニ厚キ志」、「コンメイ (懇命)」を「ネンゴロナル語<sup>カケラ</sup>ヒ。心切ナル心添へ」と説明している。『新撰字解』、『必携熟字集』、『言海』が「コンセイ (懇情)」「コンメイ (懇命)」に与えた語釈においては、「懇」ネンゴロ」ととらえ、下字(二字目)を説明しようとしている。これはさらにいえば、二字からなる漢語の一字目二字目をそれぞれ和訓でとらえるかたちの「理解/説明」とみることができる。このみかたにおいては、必ずしも当該漢語の語義が適切に「理解/説明」できるとは限らない場合もあるが、それでも「理解/説明」の一つの「かたち」ではある。

『漢語字類』、『漢語註解』は、「コンガン (懇願)」「コンキ (懇祈)」

を群化し、「懇〓ワリナキ」ととらえた上で、二字目に着目し、「願」「祈」を「ネガヒ」ととらえている。これは丁寧な「理解／説明」ともいえる。その一方で、『漢語註解』は四つの漢語を「ネンゴロ」ととらえている。これはいわば二字目には着目しない、ととらえたかたであるが、こうしたとらえかた、理解のしかたがあつたことがわかる。

『大漢和辞典』第七巻は「タンパク（淡薄）」の語義を「味が薄い。味が無い。あつさりして慾氣がない。冷淡」と説く。「薄」字字義はあらためていうまでもなく「ウスイ」であり、「淡」字字義を「アワイ」ととらえれば、漢語「タンパク（淡薄）」の語義は「アワイ+ウスイ」であることになる。一方、「泊」字にも（トマル）の他に（ウスイ）という字義があり、漢語「タンパク（淡泊）」の語義も「アワイ+ウスイ」ということになる。したがって「タンパク（淡薄）」と「タンパク（淡泊）」の語義は（中国語においても、といつておくが）そもそもちがかった。『必携熟字集』は「淡薄<sup>タンハク</sup> ウスクテガルイ」「淡泊<sup>タンハク</sup> アツサリ」（巻上、二二三丁表）と、「タンパク（淡薄）」と「タンパク（淡泊）」とに異なる語釈を置く。『日本国語大辞典』第二版は「たんぱく」「淡薄・澹泊」という形式で見出し項目をたてており、そもそも「淡泊」「淡薄」（澹泊）を区別していない。そしてこの見出し項目の語釈として「①物事の感じがあつさりとしていること。さっぱりとしていること。また、そのさま」「②執着心がうすいこと。執拗でないこと。

貪欲でないこと。また、そのさま」「③味、風情（ふぜい）、人の気持などがあつさりしていること。また、そのさま」「④色や質感などがあわくうすいこと。光がよいこと。また、そのさま」の四つを置く。この①④は「ウスクテガルイ」と対応していないように思われる。『日本国語大辞典』第二版は、現代における日本語理解を集約したものといつてもよいはずで、『必携熟字集』の「タンパク（淡薄）」に配置された「ウスクテガルイ」が「タンパク（淡泊）」との語義差をつけるために、（無理に）つくりだされたものでなければ、こうした「小さな語義差」があつた語が、次第にその語義差を失っていく可能性が あることを示唆しているのではないだろうか。特に「タンパク（淡薄）」「タンパク（淡泊）」のように発音が同じ場合は、そのこともかわつて語義差が意識されにくくなっていき、同語の異表記のようにみなされるということもあつたと推測する。

漢語辞書はごく限られた紙面に「見出し項目+語釈」を配置している。したがって、紙面が限られていなければ、語義差を説き得た、というみかたが成り立たなくはない。しかし、いろいろとことばを尽くさなければ語義差を説くことができないということは、結局はその語義差が微妙なものであるということ、漢語辞書の語釈がことさらに簡略で不自然ということではないと考える（註1）。

おわりに

『漢語新字引』（明治九年一月刊）に「征討（セイトウ）ゴセイバツ」（九十七丁表）という記事がみえる。漢語「セイトウ（征討）」を「セイバツ（征伐）」という漢語一語で説明していることになる。同様の例は、「絶命（ゼツメイ）リンジウ」（二〇〇丁表）、「泉下（センカ）メイド」（二〇二丁裏）、「聡明（ソウメイ）ハツメイ」聡慧（ソウエイ）同上」聡穎（ソウエイ）ハツメイ」聡敏（ソウミン）同上」聡悟（ソウゴ）同上」聡察（ソウサツ）同上」（二〇五丁表）、「得失（トクシツ）ソントク」（二三二丁裏）など少なくない。

『言海』には「せいばつ」征伐「謀叛ノ軍ヲ攻メ平グルコト」。征討とある。『言海』は、凡例の四十六において「同意語 (Synonyme) ハ、語釈ノ末ニ列ネタリ」と記している。ここでの「同意語」は類義語と考えることができるが、見出し項目「セイバツ（征伐）」の語釈末に置かれている「征討」は「セイバツ（征伐）」の「同意語」≡類義語としてそこに置かれていたと覚しい。あるいは『言海』には「とくしつ」得失「得ルト失フト」。損得。利害とあり、「トクシツ（得失）」の「同意語」≡類義語として、漢語「ソントク（損得）」リガイ（利害）が語釈末に置かれている。「ソントク（損得）」リガイ（利害）」は見出し項目となっていない。

『漢語字類』は「ワボク（和睦）」と「ワギ（和議）」とを群化し、「ナ

カナオリ」という語釈を与えている。『漢語註解』は「ワ」ではなく「カ」という発音であるが）この二語に「和順」「和熟」「和親」「和解」を加えて「ナカノヨクナル」という語釈を与えている。『言海』には、「わぎ」和議「和睦の評議」。「わぶく」和睦「（一）ヤハラギムツムコト」。和合。和熟。（二）タヒラギ。ナカナホリ。和親。和解とあつて、見出し項目「ワボク（和睦）」の語釈を（一）（二）二つに分けて記述し、（一）の「同意語」≡類義語として「ワゴウ（和合）」ワジュク（和熟）」、（二）の「同意語」≡類義語として「ワシン（和親）」ワカイ（和解）」を示す。これは結局は、『漢語註解』の理解とちかいてもいえよう。ただし、「わしん」和親「ヤハラギシタシムコト」。兩國ノ間ニ公ニ札ヲ修メテ交ルコト」。「わじゅく」和熟「ヤハラギ睦ムコト」。「家内」。「わじゅん」和順「氣候ノ、時節ニシタガフコト」」とあつて、類義を認めながら、各見出し項目においては、むしろ語義差を的確に説明していると覚しい。この点は、『言海』の記述態度として留意しておきたい。

明治二十二年に出版された『和漢／雅俗』いろは辞典においては、「わぶく（名）。―する（自）和睦、むつまじきなか。和熟、和合、和親。なかなかほりする、和解、行成、平成、講和」とあつて、『言海』と同じように、「（なかなかおり）」という語義と、そうではない語義とを区別し、前者の語義の類義語として「和解」を、後者の語義の類義語として「和

熟」「和合」「和親」を掲げている。

類義語は改めていうまでもなく、語義が類似している複数の語についての謂であり、類似している一方で、語義の「異なり」が語としての「存在意義」を支えているといえよう。その「異なり」が失われてしまえば、類義語は同義語となるのであって、そうなった場合、いずれかの語の「存在意義」も失われることになる。類義語が類義語として存在し続けるためには、語義の「異なり」を維持し続ける必要があり、維持し続けるために、「異なり」がより「強化」されて「距離」を保つということもあったと憶測する。

明治期において、漢語がどのように群化されて理解されていたかという「実態」を把握し、群化されていた（と思われる）漢語群がその後どのような「道筋」を辿って現代に至ったかについての観察、分析は当該時期の日本語の語彙体系のありかたを探る上で必須のことと考える。

## 【註】

註1 例えば、『大漢和辞典』は語釈に使う紙面に制限を設けていないと思われるが、「災」字を頭字とする熟語のうち、「サイオウ（災殃）」「サイヨウ（災妖）」「サイガイ（災害）」「サイキョウ（災咎）」「サイキョウ（災凶）」「サイカ（災禍）」「サイカン（災患）」「サイゲツ（災孽）」「サイコ（災故）」「サイシン（災禔）」「サイセイ（災害）」「サイナン（災難）」「サイヘン（災變）」「サイヤク（災厄）」「サイヤク（災隄）」「サイレイ（災戾）」

「サイレイ（災厲）」に「わざはひ」という語釈をまず与えている。この「わざはひ」に続けて、さらに説明を加えている場合もあるが、これは結局はこれらの漢語の語義は「ワザワイ」であるという「理解／説明」とみることができるといえる。したがって、明治期に刊行された漢語辞書が辞書として未成熟な故に、あるいは語釈に使う紙面に制限を設けている故に、簡略な語釈を置き、その結果、多くの漢語の語義差が説明されていない、ということでは、ないと思える。「災殃」については「わざはひ。苗殃。災難。災害」と説明されており、結局「サイオウ（災殃）」「シオウ（苗殃）」「サイナン（災難）」「サイガイ（災害）」を類義語もしくは（ほぼ）同義語ととらえており、「災害」ワザハヒ「災難」ワザハヒ（『必携熟字集』巻下、二三四丁表）というところえかたと変わらない。



## The Understanding of Chinese Characters in the Meiji Era-

KONNO Shinji

### Abstract

Many of the Kanji (Chinese characters) dictionary published during the Meiji Era had simple descriptions of the Chinese characters of the entry words. Each Chinese character of the entry words should have a different meaning, however if the meaning of the entry word is similar to the previous word, it would display the words “same as above.” This explains that the different Chinese characters have the same meaning. The explanation “same as above” displays an intention that the two different words with the same description would be explained in the same way. It can be seen as an attitude to group the different words with the same description comprehensively, but this is not a temporary method in the process of dictionary proofreading. This method describes how the Chinese characters should be understood.

In this paper, such a phenomenon would be called the “Chinese Character Grouping” and the purpose of this research is to feel how the Chinese characters of the Meiji Era should be understood. Though the meaning of the words is different within the Chinese lexical system, it does not necessarily demonstrate the difference in the Japanese lexical system. In Japanese, it can be inferred that the difference in the meaning of the word may be difficult to explain. In that case, it must be, after all, understood as words that has nearly similar meanings. The paper points out that the explanation “same as above” or “same as the previous word meaning” in the Chinese character dictionary reveals how the Chinese characters were understood during the Meiji Era.

The paper also analyzes “Kango Jirui (Various Chinese Characters)” edited by Kenkichi Shoubara published in the second year of the Meiji Era (1869) and “Kango Chuukai (Explanatory Notes of Chinese Characters)” edited by Satarou Tsue published in the seventh year of the Meiji Era (1874). The paper reported the actual groupings of the Chinese Characters in the two dictionaries. The relation of these two dictionaries has never been analyzed. As a result of comparing these two dictionaries, the findings displayed that while the Kango Chuukai (Explanatory Notes of Chinese Characters) referred to the Kango Jirui (Various Chinese Characters), there is a possibility that it was compiled and edited. Furthermore, as a result of this analysis, it was discovered that the first Chinese Character of the Chinese Character Idiom constructed from two characters tends to control the meaning of the whole idiom. These findings have never been reported before.